【土木計画学研究・講演集　No.24（2）　2001年11月】

近代の京都円山公園における景観構成に関する研究

The study on the landscape formation in Kyoto Maruyama Park in modern age

出村嘉史*・川崎雅史**・田中尚人***
Yoshifumi DEMURA*・Masashi KAWASAKI**・Naoto TANAKA***

1　研究の背景と目的

近年、地球環境への意識の高まりとともに、私達の生活周辺にある自然環境が注目されるようになり、同時に都市における憩いの場が希求されている。このような中で、意識的に良質な公園広場の獲得することは、豊かな都市生活の必要条件となりつつある。本研究が対象とする京都市の「円山公園」は、知名度の高い寺社の集積する東山にあり、庭園を囲んで料理屋が並び、花見席をはじめ四季折々の愉しみを有する、全国でも有数の優れた都市公園である。関連する既存研究としては、近代の円山公園を扱った丸山[1]によるものがあるが、主に社寺境内が解体する中で公園用地が成立した経緯や、用地拡張の際に行われた行政的手段について論じられており、公園そのもののデザインに注目した研究はなされていない。本研究は、円山公園成立前後の空間変容と、現地調査において明らかにした現在の空間特性とを分析することにより、近代化のインパクトのなかで創られ現在も佳良な空間を提供する円山公園になされた景観構成の詳細を明らかにすることを目的とする。

2　公園成立前後の動向

江戸期が終焉を迎えるころの円山界隈は、現在の円山公園とは大きく異なる土地・空間利用がなされ、東山の山辺という特徴に加えて、幾つかの文化的要素が集積していた。山辺の上部には、安養寺、長楽寺などの時宗の寺が存在し、特に安養寺の境内においては、急斜面を活かし変化に富んだ林泉美の庭園と建築をもつ六つの塔頭が建ち並び（六阿弥といった）、それぞれにおいて民衆に席を貸す「席貸」を営み、卓越した眺望と庭園美を背景に宴や文化活動のできる名所として知られていた。山辺の下部は、大きな境内を持つ祇園社（現在の八坂神社）が占めており、境内の大きな空間や周辺の林において、飲食・物売り・芸人・宴会など様々な活動が展開された。山辺中部では、南外れに時宗の双林寺が席貸を行ったが、大部分は真葛ヶ原という空地であり、ここには江戸中期以降多くの文人が好んで住んだ。真葛ヶ原は山辺上部下部の文化的要素を視覚的・文化的に緩やかにつなぐ役割を果たした。このように上中下部それぞれにおいて異なる空間利用がなされていたが、全体に大きな山辺としてのまとまりを持っていた（**図1**[2]）。

明治 6 年（1871）京都で社寺上地令が実施され、寺社の持つ土地の多くが一旦官有となった。その結果、山辺の土地が解体され、その後払い下げ・貸し下げが行われた。そして細分化された土地は各々の利用が為され、景観の均整がとれなくなった。

そこに明治 19 年（1886）「京都円山公園」が誕生した。当時の円山公園は**図2-a**[3]のようにかつて寺社の所有地（境内を含む）であった場所とそれらを結ぶ道路敷に公園の枠を当てはめただけのものであり、全体としてはまとまりがなかったが、それ故にこの後の

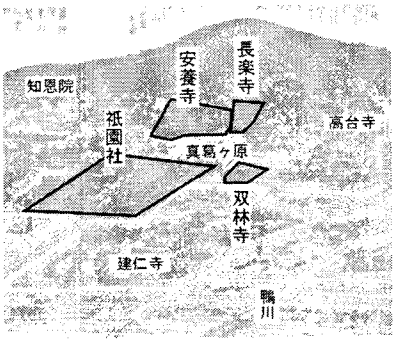

図1　近世の円山界隈（花洛名勝図会をもとに作成）

Key Words：景観、空間設計、公園・緑地
*　学生員　　京都大学大学院工学研究科 修士課程
（〒606-8501 京都市左京区吉田本町 Tel 075-753-5123）
**　正員　博士（工）京都大学大学院工学研究科 助教授
***正員　修士（工）　京都大学大学院工学研究科　助手

円山公園を特徴付ける二つの条件を満たしていた。一つは、公園地になった場所はそれぞれ近世から存在する環境的ポテンシャルを備えていた要所であった事である。つまり近世からの土地利用法を継承する可能性を維持していた。もう一つは、全国で公園づくりが行われた当時、日比谷公園のように明確な枠を用意してから成立する公園が存在する一方で、枠に関して柔軟に捉え、近世から重要であった周囲との繋がりを公園敷地で断絶することを免れた事である。

明治23年(1889)円山公園は京都府から京都市へ移管された。以後京都市は散在した公園敷地をつなぐべく公園地の拡張事業を進め、明治 41 年(1908)に現在の円山公園の敷地をほぼ獲得した(**図2-b**)。この年までに、公園内部の吉水温泉および也阿弥ホテルは焼失し、用地が京都市に返還された。

3 近代化のランドマークとしての景観要素

山辺上部の六阿弥は、近代に入ると大きく空間構成を変容させた。席貸が盛んであった塔頭は、人工温泉(吉水温泉)、洋風ホテル(也阿弥ホテル)に取って代わった。明治 9 年(1876)に開業した吉水温泉は、金閣に模した三層楼であった(**図3**[4])。三層楼は静養室兼展望室として使用されたが、その眺望の良さが人を集め、開業後すぐに周囲に新たな席貸が多く設けられて遊興場となった。この吉水温泉は六阿弥の春阿弥跡にあり、円山でも特に高台であった。この三層楼は洛中からもよく目立ち、円山のランドマークとして認知されることとなった[5]。一方也阿弥ホテルは明治 12 年(1879)に也阿弥その他の施設を買収した井上万吉によって、待望された外国人用ホテルとして登場した。館内からの眺望は素晴らしく、訪れた外国人の撮影した写真が多く残されている。也阿弥ホテルはその後敷地を広げ増築し、スケールの大きな建築を山辺に林立させたが(**図4**[6])、明治 39年(1906)の火災後、京都市が公園地として買収し、営業を終了した[7]。

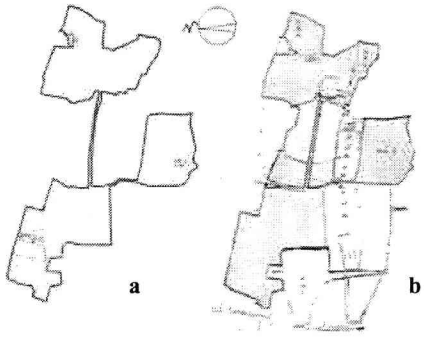

図2　円山公園の拡張（京都府庁文書をもとに作成）

山辺下部の祇園社の門前では、江戸期から賑わった二軒茶屋の中村屋が、屋号を中村楼と変えて、洋室を八室持ったペンキ塗りの二階建ての洋館を建て、明治中葉まではホテルも兼業し、洋食も扱った[8]。明治 42 年(1909)、中村楼の東に洋館が建った。タバコ製造で財をなし、財閥を形成し始めた村井吉兵衛の別邸として、アメリカの建築家ガーディナーが設計した長楽館である(**図5**)。政界財界の賓客をはじめ海外の要人も多くここへ招かれるなど社交娯楽の一機関とする意図によるものであった[9]。外装は禁欲的で厳正なプロポーションのネッサンス様式四階建てであるが、壁に張られたクリーム色のタイルが柔らかな雰囲気を加えて周囲への調和を図っている。

一方で近世から受け継がれてきた景観要素もみられた。上地された祇園社社務執行の院にあった枝垂桜は、明石博高により伐採を免れ保護され、公園設立の頃には、**図6**[10]のように多くの掛茶屋が出来、年々人気を呼び円山のシンボルとなった。優れた景観を保存し、周囲に席貸を作り座して飲食や宴を持つことは、近世から円山界隈で行われてきた方法であった。また、六阿弥の一つ、左阿弥だけは周囲の著しい変貌に関わらず、近世の空間構成をそのまま

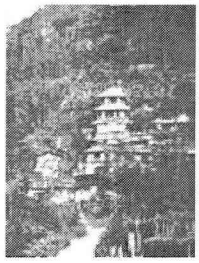

図3　吉水温泉

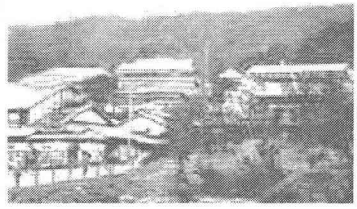

図4　也阿弥ホテル

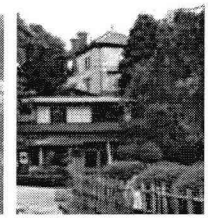

図5　長楽館遠景

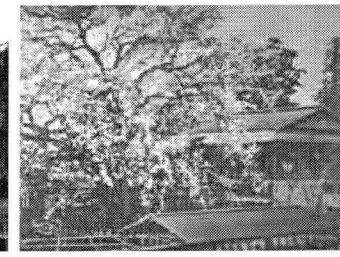

図6　枝垂桜周辺の掛茶屋

保存し、日本料理屋として経営を始めた。

以上それぞれを見てきた文化要素の変遷をまとめたものが**図7**である。これにより、山辺上部における活用性の高さと難しさ、山辺下部における活用の自由度の高さが窺える。近世からの利用の仕方を上手に踏襲したものが現在まで残っているものと思われる。また、公園の整備以前には、山辺中部における近代化のインパクトは目に見えて現れず、次の総合的な景観デザインを待たなければならなかった。

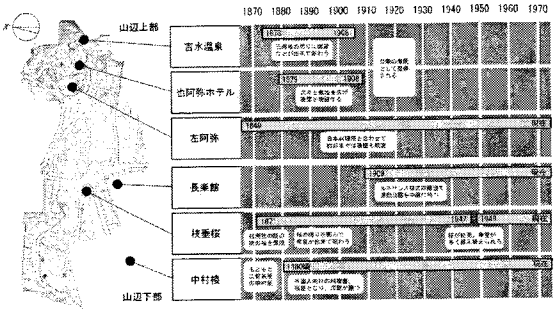

図7　円山界隈における文化要素の変遷

4 総合的な景観構成のデザイン

現在の地形を分析すると、公園の東西立断面（八坂神社西門―安養寺）は**図8**のようであり、先に述べてきた山辺上部、中部、下部間には、明確な地形的な分節があることが分かる。つまり、山辺下部から上部へ段階的に傾斜が急になっている。従って山辺下部と上部では傾斜による断絶が大きく、この間を上手くつなぐことが円山公園の景観成立に関して重要な課題であったと思われる。

京都円山公園誕生から拡張を含み公園施設が整うまでの公園整備の概要をまとめたものが**表1**[11]である。拡張によって得た真葛ヶ原を中心として、年々公園全体が形作られていく様子がわかる。造園の履歴の中で、特に注目すべき項目は、拡張後の円山公園内で作庭を小川治兵衛が担当した事である。彼は近代日本庭園の先覚者といわれた庭師であった。彼の作庭に共通して言える事は、近代に琵琶湖疏水によって得られるようになった豊富な水を使い、東山を借景にして、あるがままの自然の再生を意図し、雄大な風景を展開した事、或いは日本庭園の因襲的な空間と様式にとらわれず、洋風庭園の概念なども自由に取り入れて「植治流」と呼ばれた新鮮な庭作りをした事である[12]。彼による公園整備によって、現在目にする円山公園の景観がほぼ出来上がった。

表1　円山公園整備の流れ

西暦	整備事項	備考
1887	櫻樹数百本植え足し	
1889		所管が京都府から京都市へ
1891	禁止事項の公園掲示	
1892	「アーク」灯の取付	第1次公園地拡張はじまる
1893	京都市参議会が公園仮事務所の設置を決定	
	山櫻、枝垂櫻３５本程市内から移植	
1894	八坂神社の末社太田社西北に威垣を設置	
	円山公園知恩院間の谷川の工事を入札で実施	
1895	485坪新池及び周辺開設	
	拡張工事によって旧御台場の構築物の撤去	
	自然の丘陵を利用した渓谷、四季の花樹を植樹	
	疏上疏水から引水し、噴水を設置	
1900	北村楽蔵の寄付、樹木植付費等に使用	
1904	八坂神社が公園池排水を非常用水として引水	
1909	円山公園の拡張工事を直営工事より	第2次公園地拡張はじまる
1910	公園入口の改修を道路拡張と並行	
	園内の道路拡築、新設を急ぐ	
1911	園内道路の延長、溝渠排水管敷設、上水道敷設	
	左阿弥北接の紅葉谷を知恩院又は長楽寺と交換	
	八坂神社西接前と園内地の一部を交換整理	
1922	公園改良工事着工	←小川治兵衛・武田五一に依頼
1923	一連の拡張、改良工事竣工	
1928	真葛ヶ原に音楽堂を建設	
	枝垂れ櫻の西方にはラジオ塔の設置	
	園内主要道路の舗装、休養施設の改善等の完備	

現在の円山公園を丁寧に観察すると、このときに造成された地形と、以前からの地形を残してある部分が判断できる。特に変化の著しかった山辺上部について、地形上の変容をまとめたものが**図9**である。ここで注目すべきは、新たに山辺の肩を作るように盛土された土地が、新しい円山公園の景観を特徴付けている事である。傾斜の大きい部分を全面に出してきたことにより、そこより上の山辺上部への連続を作り出した。ここに新たに作られた道は細かく蛇行し、かつて六阿弥のあった土地の境界を大胆に貫いているが、近世に造成された石垣などが残され起伏に富んだ目に楽しい景観を呈し、名刹の名残も見出だせる。

公園地拡張以前の山辺中部は明治維新以来荒地

図8　円山公園東西の連続率断面図

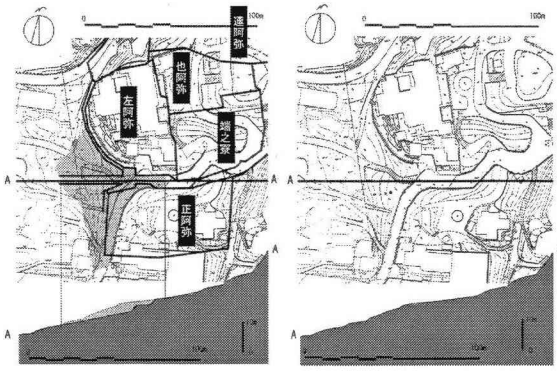

図9　山辺上部における明治初期の地形(左)と現在の地形(右)

となり雑草が繁茂しバラックが散在していたが、拡張後に植治の自然を基調にした空間構成によって山辺の場所性が活かされることとなった。流水が導入され、先に見た造成された肩の部分より落ちる滝（図 10）からはじまり、それは公園を蛇行しながら豊かな植生が影を落す浅瀬を、心地よい音をたてて流れ、中央の噴水のある池へ注ぐ。このようにして創られた水の流れに絡みつくようにして苑路がデザインされている。苑路は図 11 のように別れ結びながら公園全体に張り巡らされ、水に近づくほど苑路周辺の植生の種が増え密度も高く、「あるがままの自然」を感じさせる。逆に、水から遠のくほど周囲には高植えされ手入れされた桜が目立ち、人為的な自然を用いて開明性を持たせている(図12)。この明解な対比を用いた近代的な造園により山辺の自然が意図的に強調されている。また、このような苑路を行くにつれて移り変わる景観を持つ回遊式庭園の手法をとりながら、進路・方向性についての制約はなく、どの方向からのアクセスに対しても柔軟であるため、周囲との無理のない接続に成功している。例えば公園中央付近の、北の岡崎公園、青蓮院、知恩院などと、南の東大谷、建仁寺、清水寺などを結ぶ導線として外部と接続する道の通し方もごく自然である。また、近世からの名残として園内に多く存在する飲食店や枝垂桜、先に述べた近代のインパクトとして登場した洋風建築に関しても、それぞれが全体の中に調和している。

図 10　水源の滝

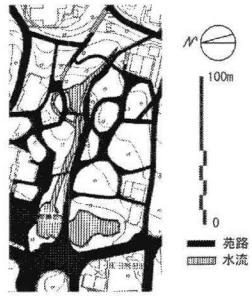

図 11　山辺中部の苑路と水流

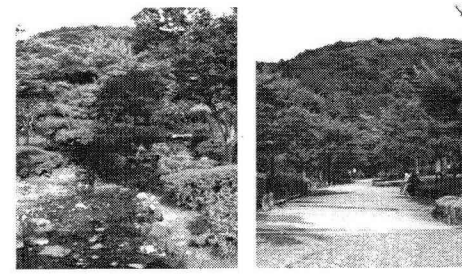

図 12　あるがままの自然と人為的な自然との対比

こうした植治の造園の結果、真葛ヶ原の接続の機能がより高度に蘇り、公園内全体に山辺としての一体感を取り戻したといえる。

5　おわりに

近世から大きく空間構成を変容して成立した円山公園は、以上のような総合的な景観デザインの適用により、近代化の影響を直接的に受けた諸要素を調和させた。その調和の景観構成においても、近代の特徴ある方法を適用しており、円山公園自体が一つの近代の象徴であるような印象を受ける。

調査をしつつ現在の円山公園を歩くと、豊かな植生と水流により清涼感のある山辺中部に比べて、かつてその利用の多様性を極めた山辺上部の寂しさが気になった。近代における先人の知恵を踏まえつつ、ここにおける景観デザインに関して新たな提案をしたいと考えている。

1　丸山宏：京都円山公園成立前史、1984／円山公園の拡張、1998
2　花洛名勝図会（1859）をもとに筆者作成
3　京都府庁文書（官有土地台帳、庶務課地理、1887）をもとに筆者作成
4　田中緑紅：なつかしい京都、京を語る会、p.12、1957.12
5　例えば明治 23 年（1890）発行の「改正新刻京都市郡名所新図」では円山一帯を「圓山温泉」と紹介している。
6　吉田光邦監修、白幡洋三郎他編：京都百年パノラマ館、淡交社、p.24、1992.7
7　京都市編：名勝地円山公園の沿革、p.48、1996.8
8　筆者による 2000.1.20 の中村楼当主からのヒアリングによる。
9　京都市編：資料京都の歴史 10 東山区、平凡社、p.207、1987
10　田中緑紅：なつかしい京都、京を語る会、p.12、1957.12
11　京都市編：名勝円山公園の沿革、1996.8 をもとに筆者作成
12　杉田博昭：近代京都を生きた人々／明治人物誌、京都書院、pp.5-21、1987.4